

## 「わかる」文法授業の実践



Sato Shinya  
佐藤 伸也

福島県立安積黎明高等学校教諭

### 1. はじめに

英文法とは、4技能を伸ばすために欠かすことのできないルールであり、文法を理解することなく言語学習をすることは、野球のルールを知らないで試合をするのに等しいと思います。もちろん、ルールばかりに詳しくなって、打撃や守備の練習をしなければ何の意味も持たないわけで、学んだルールは演習問題で鍛え、実際の中で活用することで初めて自分のものになります。

中学校では外国語学習の目標として「聞くこと話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う」ことがあげられています。そのため教科書には基本的で平易な表現が多く、文法事項についてはあまり触れなくても感覚的な理解だけで十分な場合が多いようです。一方、高校では「情報や相手の意向などを理解したり、自分の考えなどを表現したりする実践的コミュニケーション能力を養う」ことが目標となり、理解や表現のための言語材料も一層高度なものになってきます。従って、感覚的理解だけでは対応できず、文構造を論理的に理解する必要性が増してきます。そのため、高校入学当初より、系統的な文法の学習が不可欠になってきます。

科目としてのオーラルコミュニケーション誕生以来、「文法指導不要論」が活発になり、わざわざ時間を設けてまで文法指導をする必要がないという声がありますが、母国語を習得する過程で見られるような「言葉のシャワー」を英語学習に期待することは国内では不可能です。実践的英語力を効果的に向上させるためには、系統的な文法事項の理解が必要になってきます。英文法指導は、長く複雑な文構造の理解を可能にするだけでなく、作文や会話における正確な表現力の育成にも大きく貢献しています。

「文法」という科目が無く「コミュニケーション」、 「実践的」という言葉の隆盛のために、「文法指導」という言葉が時代遅れの響きを持つことはやや残念なことに思われます。

以下は、1年次における本校での文法事項の指導についてです。

### 2. 本校の現状

#### ①本校生の実態

本校は各学年普通科9学級からなる共学7年目（前身は女子校）の学校であり、ほぼ全員が大学進学（主に国公立大学）を目指しています。表1、2のように英語を得意とする生徒が多く入学してきますが、文法に対して苦手意識を持っている生徒が目立ちます。また、高校での学習速度の速さや学習量の違いに順応できずに悩んでいる生徒も多いようです。

表1 本校生の得意科目と不得意科目(361名)

	英語	数学	国語
得意科目	30.9%	12.0%	11.1%
不得意科目	15.6%	44.3%	17.3%

表2 英語学習上の苦手な項目(361名)

1	文法が理解できない	27.0%
2	発音、アクセントがわからない	20.1%
3	英作文ができない	16.2%
4	リスニングが聞き取れない	12.5%
5	語句整序問題ができない	3.6%

#### ②本校の英語の時間数

本校は45分授業7～8校時の授業形態を取っていますので、週あたりの回数と単位数は必ずしも一致はしていません。1年次では「OC I」3時間から1時間と「英語 I」4時間から1時間をもらう形で、文法指導の時間に週2時間を

充てています。さらに、長期休業中や毎月2回の土曜日に特別講座を開講して長文読解力やリスニング力の向上に努めています。

### ③本校の目指す英語力

4技能の総合的な発達や異文化理解を目指すことに加え、進学校として以下の事項を目標に定めながら取り組んでいます。

- ア. 外部模擬試験で平均偏差値 60 以上
- イ. センター試験で8割以上の得点率
- ウ. 国公立二次試験に対応できる読解力、作文力の育成
- エ. 実用英語検定2級取得

## 3. 体系的文法指導の必要性

### ①中学校での文法指導

中学校においては、文法事項は「理解の段階にとどめる」ことが多い上に、読むことや書くことよりも、聞いたり話すことに重点を置いた題材が多く用いられています。当然ながら文法構造が単純なものが多く、文法事項や用語についての知識の有無を生徒にたずねると「中学校ではやらなかったが、塾では習った」という答えが多く返ってきます。

### ②高校での文法指導

高校では新出語数が急激に増加する上、文法構造もかなり複雑化、長文化してきます。感覚的な解説では不十分であり、仮に「理解の程度にとどめておく」だけだとしても文構造の理解のために生徒の側に文法的な基礎知識がないとどうにもなりません。学年が進行すれば、さらに掘り下げた文法事項の説明が必要となります。

例えば、

Kyoto is the city which I visited last year.

Kyoto is the city where I went last year.

の下線部の差異について、自動詞、他動詞、代名詞、副詞、関係詞等の品詞やその働きについて触れないで説明することは極めて困難です。高校での学習は感覚だけでは通用しないという現実、戸惑う1年生も多い反面、論理的な説

明を受けることで、曖昧だったものが頭の中で整理されることに喜びを見いだす生徒もいます。

### ③英作文にみる文法力

本校では英作文指導に力を入れていますが、go to shopping, it is rainのような表現を頻繁に目にします。日本語に合う英単語を調べ、単純に当てはめようとする傾向が強く、文法的な間違いや単語の妥当性について注意を払わない事例がよく見られます。基本的な文法事項が実際の場で活用できないという現実があります。英作文は、総合的な英語力が必要ですし、国公立大学の二次試験だけでなく、会話や英語のメール作成においても自己表現力の育成は極めて重要な課題です。

### ④英語 I での文法事項の取扱い

英語 I の教科書の各課末に文法事項のまとめが掲載されていますが、既習事項の復習ならともかく、新出事項の取扱いとしては、かなり概略的であるために「意味がとればいい」という程度の指導になりがちですし、生徒は理解が不十分なままの状態になってしまいます。特に本校のような実質週3時間での授業ではなおさらです。

英語 I の教科書のような文法事項の取り上げ方は文法に対する理解の消化不良を引き起こし、文法嫌いや英語嫌いを増やす原因となっているのかもしれない。文法指導は基本的なルールを習得させることであり、論理的に時間をかけて指導することは、それぞれの文法事項への納得を促し、深い理解へと繋がるはずで

## 4. 効果的で楽しい文法の授業のために

英文法指導は、教師が一方的に説明し、生徒はひたすら板書するか演習問題を黙々と解くといった魅力に欠ける消極的な授業形態が多い現実があり、文法嫌いを作る要因ともなっています。「楽しい」という言葉の定義は極めて難しいですが、「わかる」ことは「楽しい」はずです。つまり、「わかる文法授業の実践」を心掛ける

ことが「楽しい」文法の授業に通じるはずです。

以下は、平凡ではありますが、現在の1年生に対する本校の取り組みです。

### ① OCの授業における文法指導

OC IでのALTとのTTの授業において文法事項の復習を行っています。直前に学習した文法項目を多く含んだスクリプトを作成し、ALTのスピーチを聴き、質問に答えたり、生徒同士のペアワークで、前時で学んだ文法事項を口語的に復習する時間を設けています。5分程度で、内容も基本的なものが多いのですが、普段の文法の授業に欠けている「聞く・話す」ことを通しての学習は効果的であり、知識としての文法から実践のための文法に高めることができます。生徒たちの表情も明るく、積極的な取り組みが見られます。

### ② 文法用語の「定義」の共有化

文法の知識が欠けている生徒が多い上に、中学時代の学習内容が系統的に記憶されていないのが現状です。そのため、基本事項の理解を徹底させる必要があります。文法用語を簡潔な「定義」づけることで、生徒たちへの効率的な定着を図っています。表3は学問的に必ずしも正確とは言えませんが、生徒に定着させるために全クラスで4人の英語担当者が共通に用いている「定義」の例です。担当者全員が共通の「定義」を用いることで、英語IやOC Iでも補足しあえるほか、2年次以降担当者が変わっても、指導の一貫性が保たれると思います。

### ③ 英語Iでの文法学習との関連の強化

英語Iでは各課で1～2項目の文法事項を扱いますが、教科書では詳細についてはあまり触れられていません。さらに、解説や定着のために時間を割くことが難しい上に、付属のワークブックにはやや発展的な問題を含むことが多いのが現状です。そのため、文法指導の授業との関連性を強化させ、可能な限り同時に扱うように、文法用テキスト(SEED 28)での学習順序を入れ替えることで指導の関連性を図り、学習事項の定着を図るようにしています。例えば、関

表3 定義の一例

文法用語	定義
補語 C	S=C, O=C 名詞形と形容詞がなる。
修飾語 M	前置詞を伴っている語句、副詞はM
形容詞	名詞を修飾 or 単独で用いて補語に
副詞	名詞以外(主に動詞)を修飾
前置詞	名詞の <u>前</u> に <u>置く</u> 品詞
接続詞	<u>節</u> (SV)を <u>続ける</u> 品詞
現在完了	経験, 結果, 継続, 完了の4k
過去完了	4k + 1K (過去よりも古い過去)
関係代名詞 (関係副詞)	名詞と代名詞(副詞)のダブリに、 代名詞(副詞)の代わりに用いて2 つの文を1つに関係づける働き。

係詞は英語Iの教科書では6月に登場し、書き換え問題や英作文の演習問題もある上、サイドリーダーや外部模擬試験などでも頻繁に出現します。当初の文法指導計画では、本校の場合9月ごろに取り扱う予定でしたが、3カ月繰り上げて学習することで、効率化を図りました。仮定法も夏課外との関連で同様の処置を講じました。文法のテキストと英語Iの教科書は別個のものと考えずに、関連づけて指導できるように、順序にこだわらず柔軟な利用が必要です。

### ④ 共通プリントの作成と重点事項の確認

現在4人の教員で1学年を担当していますが、30年のベテランもいれば2年目の若手もあり、指導法や文法事項に対する考え方に開きがあるのが現実です。そのため、全クラス共通のプリントを協働で制作することにより、指導の共通性を図るよう心掛けています。

例えば、比較級では最上級の文を比較級や原級を使って表現することに重点を置くこととし、「比較級・最上級を用いたいろいろな表現」については1年次ではほとんどを割愛するようにしました(例; A is no more B than C is D./ A is not B any more than C is D.)。逆に、英語Iや模擬試験の関連から、SEED 28では不定詞や受動態の課で触れていない「使役動詞や知覚動詞の受動態」についてプリントで取り上げることにしました。

### ⑤ 英作文を通しての文法事項の指導

今まで input した文法知識を英作文という形で output させることで、一層の定着を目指しています。テキストには英作文の演習問題が少ないので、文法共通プリント作成の際には、必ず取り扱った文法事項を用いた簡単な英作文を数題取り入れています。英語 I でも課のテーマ（自己紹介、環境問題、将来など）に沿った 50～100 語程度の英作文を、教員側の負担が大きくなるように月 1 回程度に行っています。生徒は、文の構造に加えて時制や人称にも注意を払うようになり、書いて表現することへの抵抗感が薄れつつあるように思えます。英作文指導は、自己表現能力を高める上では不可欠なものであり、継続的な添削指導は、実践的文法力の向上に大きな効果をもたらすと思います。

### ⑥ CD 教材の活用

本校では、定期考査の際にリスニング単独の試験を行っています。その際に、サイドリーダーやリスニング教材付属に加えて、総合英文法 (SEED) の暗唱例文 CD からディクテーションの形式で出題しています。毎回の考査範囲に含めることで家庭でも CD を聴くようになり、文法事項を含んだ英文を理論面からだけでなく聴覚を使って学習することができます。これが、発音やイントネーションを学習することにもつながり、学習事項のより一層の定着が図れます。

### ⑦ 演習問題の提示

文法事項の学習後には、演習問題を多くこなして知識の定着を図る必要があります。模擬試験や入試の過去問からピックアップしたプリントを作成して 2 年後の入試本番をイメージさせたり、SEED 28 の学習事項が網羅されている関連 CD 「Test Builder」を用いて作成した演習問題を解答付きで配布し、自学自習用に活用しています。「Test Builder」は簡単に何種類も問題作成が可能なので、効果的な使用が可能です。

## 5. 最後に

英語 I・II の授業は、4 技能の総合的な発達を目指して教授法の研究も進み、バリエーションに富んだ授業が展開されています。一方、英文法の授業は、科目として存在しているわけではなく、「増単」や科目の一部を借用して行われているので、指導法にあまり重きが置かれていないのが現状です。結果として、教師主導の一方的な解説授業を通して盛りだくさんの文法事項が教え込まれます。

オーラルコミュニケーション能力の育成こそが英語教育の最大の目標と言われて久しくなります。そのような状況下において、英文法を体系的に指導していくことに後ろめたさを感じることも多かったです。ここ 10 年来のインターネットの急速な普及によって、読むことや書くことに重きを置いたコミュニカティブな英語の重要性が再認識されるようになってきました。英文法指導は、日本語とはまったく構造を異にする英語の規則を理解させることであり、そのルールの習得こそが、文の構造や働きを理解することを助け、正確に読んだり話したりすることを可能にします。また、文法指導を通して言葉の持つ面白さや日本語との違いについて理解を深めることも文法指導の役割です。

本校での試行錯誤的取り組みに斬新なものはありませんが、高校 1 年という初期の段階で、担当教員全員で協働して内容を精選しながら系統的に文法指導を行うことは、全生徒にわかりやすい授業を提供し、文法嫌いを少なくすることになると思います。現在の文法学習を、2 年次からのライティングや英語 II の授業にどのように反映させていくかがこれからの課題でもあります。